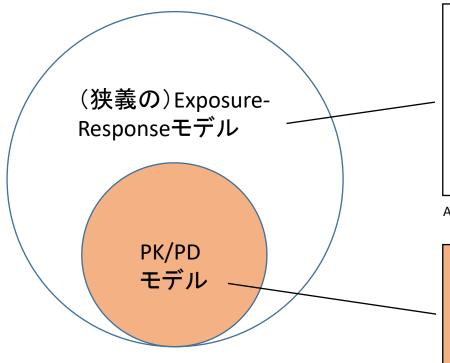
1. PK/PDモデル

医薬品開発のためのPPK/PDセミナー2025 上級者コース

本セミナーでの定義: PK/PDモデルとExposure-Responseモデルの違いについて

広義のExposure-Responseモデル



- Exposure = 要約変数(例: AUCss、 Cmin,ss等)
- Response = 一時点の値、要約変数 (AUEC等)、または推移
 - 一般に、臨床エンドポイント

AUC,ss: 定常状態におけるAUC、Cmin,ss: 定常状態におけるCmin

- Exposure = **推移**(例:血中薬物濃度 推移)
- Response = 推移
 - 一般に、バイオマーカー

なぜPK/PD関係をモデル化するのか?

薬理作用は、作用部位中薬物濃度に基づいて引き起こされるから

2.1.1 用量-曝露-反応関係 (付録 6-1 も参照されたい)

薬物を投与した際の用量と反応の関係は、用量、全身循環血中薬物濃度又は作用部位中薬物濃度として観察される曝露、さらに薬物の曝露により引き起こされた薬力学作用とその結果としての有効性又は安全性の関係として説明できる(図 1)。

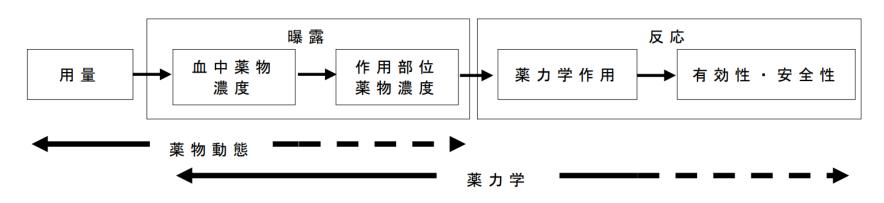
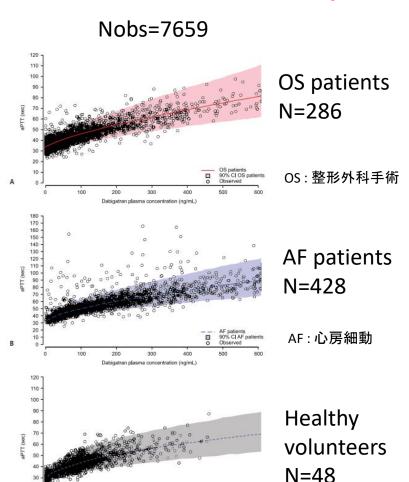


図1薬物の用量、曝露と反応の関係

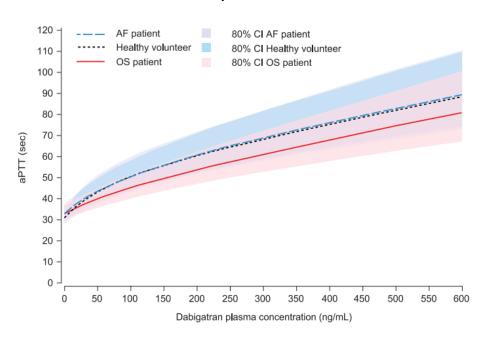
では、なぜPK/PD関係を「モデル化」するのか?

- Model is Descriptive
 - 大量のデータを情報と誤差に分離し、情報を少数のパラメータに集約できる
- Model is Explanatory
 - ・データの背景にあるシステムを理解できる(例:メカニズム、個体差要因)
- Model can Simulate
 - 実際に検討していないシナリオの結果を予測できる
 - 検討していない用量、用法、集団(サブ集団、選択・除外基準 設定)・・・

Model is **Descriptive**



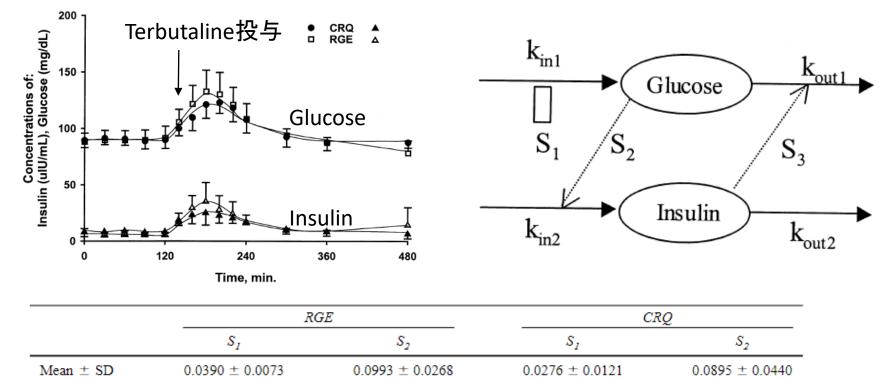
Nparm=13



Dabigatran投与後のPK/PD関係(血液凝固活性指標 aPTT)は、健康被験者、OS患者、AF患者の間でほぼ同様であることが示された

Model is **Explanatory**

0.0334 - 0.0444



RGE: Arg-19/Gly16/Glu27 haplotype. CRQ: Cys-19/Arg16/Gln27 haplotype.

0.0186 - 0.0366

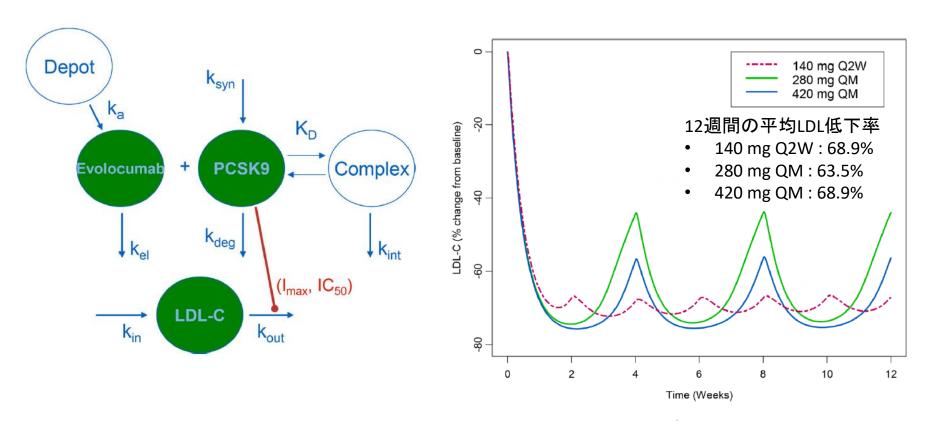
 β 2受容体の遺伝多型(RGE vs CRQ)はterbutaline投与後のglucose産生促進の過程 (S_1) に影響を及ぼすことが示された。これは β 2受容体を介した糖新生亢進のメカニズムと整合する。

0.0794 - 0.1192

95% CI

0.0569 - 0.1221

Model can Simulate



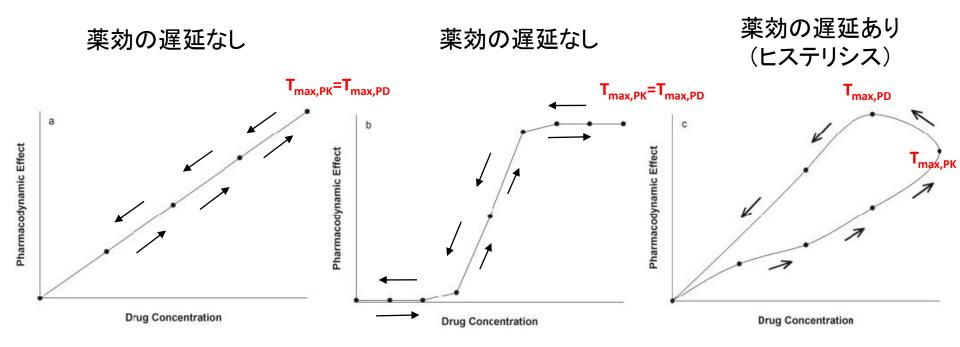
Evolocumab 140mg Q2Wと同様の平均LDL低下率をQM投与(2倍の投与間隔)で得るためには、3倍の用量(420mg QM)が必要であることがシミュレーションにより予測された

Q2W:2週間隔、QM:4週間隔

様々なPK/PDモデル(構造モデル)

PK/PDモデルを構成する要素

- 薬理作用(drug effect)のモデル
 - 血中濃度と薬力学データの関係(e.g., Linear, Emaxなど)
- 薬効の遅延(drug effect delay)を説明するモデル
 - 薬効の遅延がない場合は直接反応(direct response)モデルともいう



薬理作用(drug effect)のモデル

あるいは直接反応(direct response)モデル

薬理作用(drug effect)のモデル

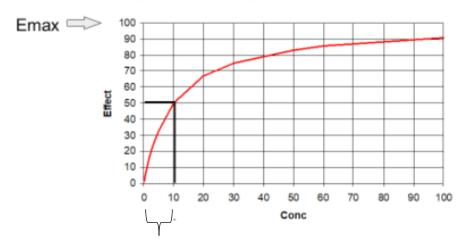
- Emaxモデル
 - Drug effect = Emax * C / (C + C50)
- Sigmoid Emaxモデル
 - Drug effect = Emax * C^{γ} / (C^{γ} + $C50^{\gamma}$)
- ・観測濃度範囲でプラト一領域が見えない場合:
 - Linearモデル
 - Drug effect = Slope * C
 - Log-linearモデル
 - Drug effect = Slope * logC
 - Powerモデル
 - Drug effect = Slope * C^γ

なぜEmaxモデル?

- Drug effect = Emax * C / (C + C50)
- 薬理作用データと相性がいい
 - 多くの場合、薬物濃度の増加に対する薬理作用の増加率は高濃度 域で頭打ち傾向が見られる(経験的根拠)
 - 受容体:リガンド=1:1で結合する場合に受容体占有理論で数式的に 導かれる関係(メカニズム的根拠)
- 低薬物濃度域ではLinearモデルに近似される
 - Drug effect = Slope * C
 - Slope = Emax/C50に相当
 - 観測濃度範囲でプラト一領域が見えない場合はLinearモデルを使うとよい
- Emaxの20~80%濃度域ではLog-linearモデルに近似される
 - Drug effect = Slope * logC
 - メカニズム的根拠はない
 - 血中濃度0の場合は定義できない

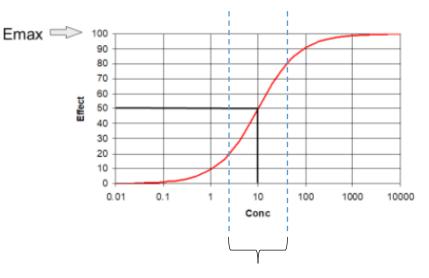
EmaxモデルとLinear/Log-linearモデルの関係

血中濃度と薬力学データの関係 (Emax model)



Linearモデル Drug effect \sim Emax/C50*C = (100/10)*C

Log(血中濃度)と薬力学データの関係(Emax model)

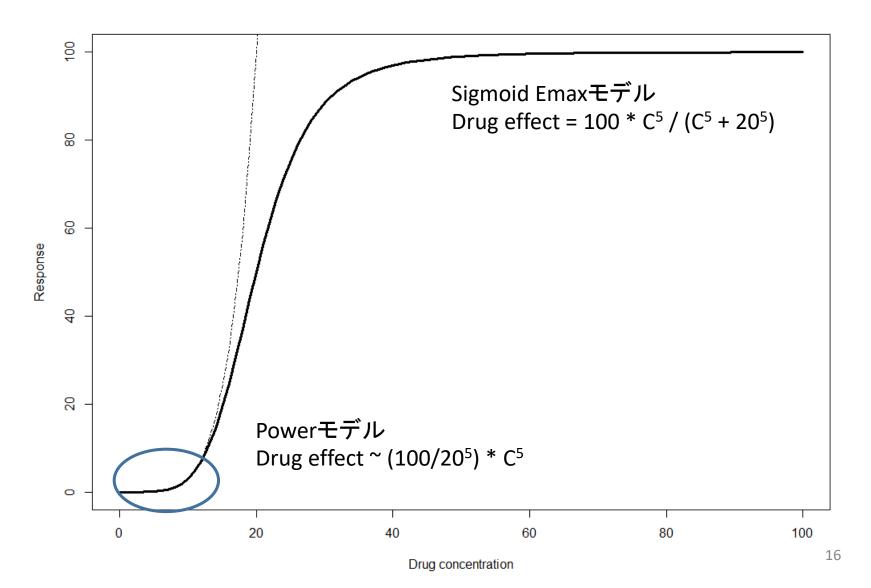


Log-linearモデル Drug effect ~ Slope*logC

なぜSigmoid Emaxモデル?

- Drug effect = Emax * C^{γ} / (C^{γ} + $C50^{\gamma}$)
- ・これも薬理作用データと相性がいい
 - 薬物濃度の増加に対する薬理作用の増加率はしばしば低濃度で増加傾向、高濃度で頭打ち傾向が見られることがある (経験的根拠)
 - 受容体:リガンド=1:γで結合する場合に受容体占有理論で数式的に導かれる関係(メカニズム的根拠)
 - Goutelle, et al. (2008)
- 低薬物濃度域ではPowerモデルに近似される
 - Drug effect = Slope * C^γ
 - Slope = Emax/C50/に相当
 - ・ 低濃度で薬理作用の増加率に増加傾向があり観測濃度範囲で プラトー領域が見えない場合は、Powerモデルを使うとよい

Sigmoid EmaxモデルとPowerモデルの関係



薬効の遅延(drug effect delay)を説明するモデル

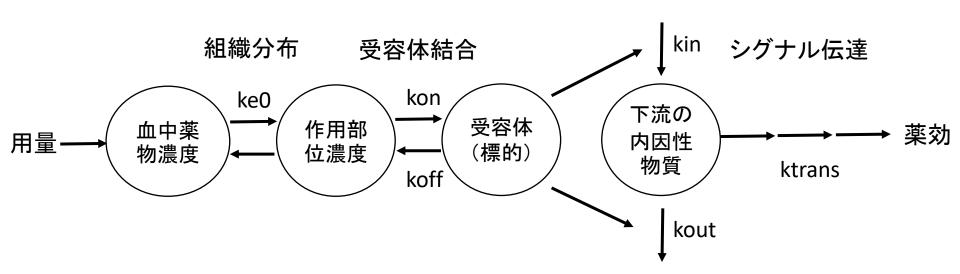
薬効の遅延(drug effect delay)を説明するモデル

- 効果コンパートメント(effect compartment)モデル
- 間接反応 (indirect response) モデル
- ・ 受容体結合(receptor binding)モデル
- シグナル伝達(signal transduction)モデル

そもそも、なぜ薬効は遅延するのか?

これらの過程のどこかに遅いプロセス(律速段階)が存在するため

内因性物質の変動

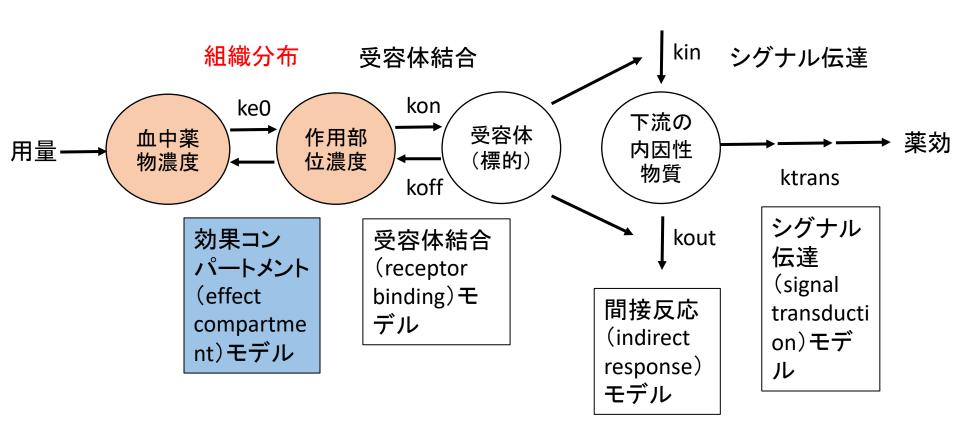


そもそも、なぜ薬効は遅延するのか?

これらの過程のどこかに遅いプロセ 内因性物質の変動 ス(律速段階)が存在するため kin シグナル伝達 組織分布 受容体結合 kon ke0 下流の 受容体 作用部 血中薬 薬効 用量 内因性 (標的) 物濃度 位濃度 物質 ktrans koff シグナル 効果コン 受容体結合 kout 伝達 パートメント (receptor (signal (effect binding) ← 間接反応 transducti デル compartme (indirect on)モデ nt)モデル response) ル モデル

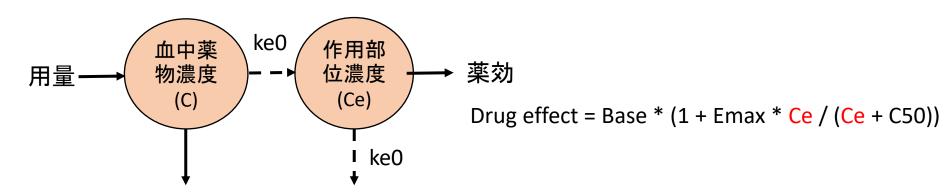
効果コンパートメント(effect compartment) モデル

内因性物質の変動



効果コンパートメント(effect compartment) モデル

組織分布



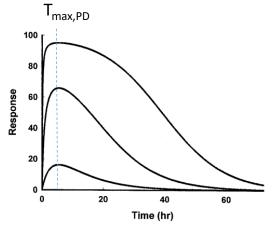


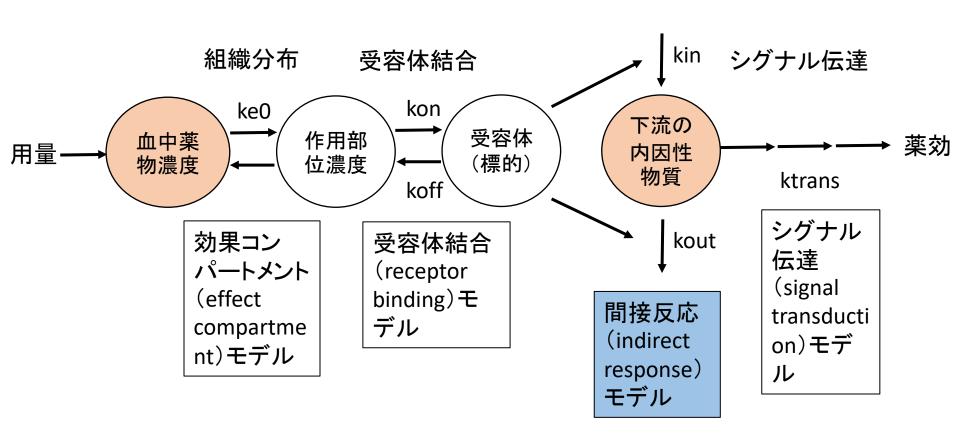
Fig. 2. Biophase distribution model.

$$\frac{dCe}{dt} = ke0 \cdot C - ke0 \cdot Ce = ke0 \cdot (C - Ce)$$

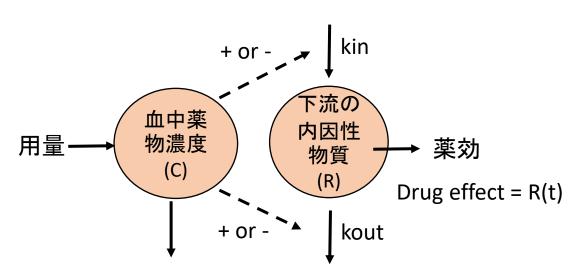
 $T_{1/2 \text{ ke0}} = \log(2)/\text{ke0}$; half-life for equilibration

このモデルではT_{max.PD} は<u>用量レベルで不変</u>

内因性物質の変動



内因性物質の変動

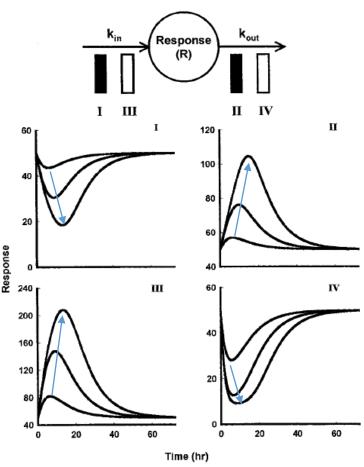


$$\frac{dR}{dt} = kin \cdot (1 \pm f_1(C)) - kout \cdot (1 \pm f_2(C)) \cdot R$$

R(0) = kin/kout; baseline response (一定値を仮定)

このモデルではT_{max.PD} は<u>用量の増加とともに遅延</u>する

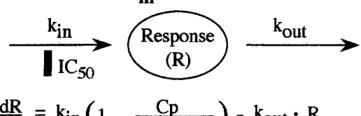
Four basic models: I, II, III, IV



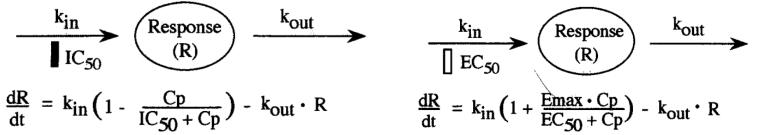
Four basic models: I, II, III, IV

$$\frac{dR}{dt} = kin \cdot (1 \pm f_1(C)) - kout \cdot (1 \pm f_2(C)) \cdot R$$

I. INHIBITION - kin



III. STIMULATION - kin



II. INHIBITION - kout

$$\frac{k_{\text{in}}}{\text{Response}} \xrightarrow{k_{\text{out}}} \frac{k_{\text{out}}}{\text{IC}_{50}}$$

$$\frac{dR}{dt} = k_{\text{in}} - k_{\text{out}} \left(1 - \frac{Cp}{IC_{50} + Cp}\right) \cdot R$$

IV. STIMULATION - kout

Response
$$(R) \qquad k_{out}$$

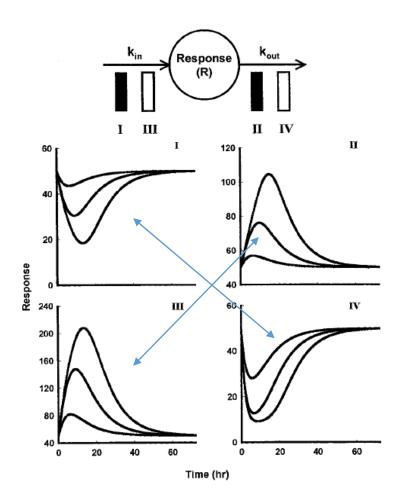
$$| EC_{50} \rangle$$

$$\frac{dR}{dt} = k_{in} - k_{out} \left(1 + \frac{Emax \cdot Cp}{EC_{50} + Cp}\right) \cdot R$$

KEY: EC₅₀ Stimulation

IC₅₀ Inhibition

Four basic models: I, II, III, IV



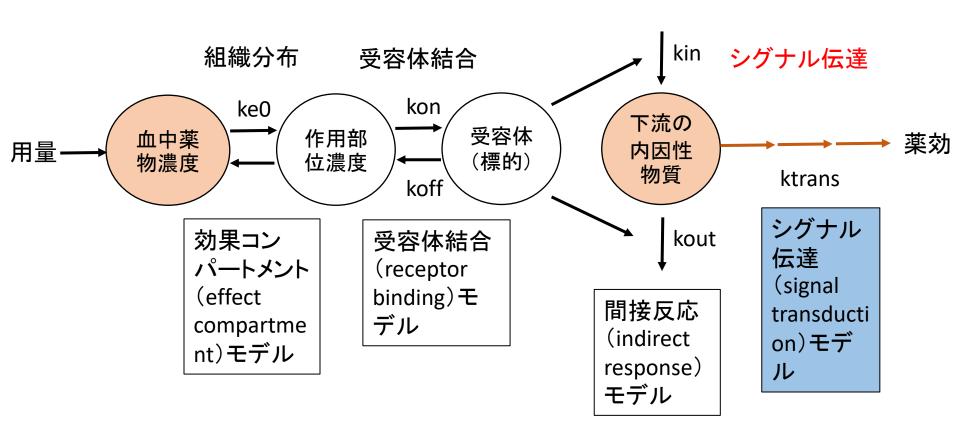
- 「モデルI or IV」、「モデルII or III」は どういう方針で選択したらよいか?
 - 薬効のメカニズムに基づけばよい
 - もしメカニズムが不明な場合は、モデルを当てはめてdata-drivenに識別する
 - 実際にはなかなか識別は難しい
 - モデルの識別可否は試験デザインに大きく 依存
 - 複数用量(少なくとも1用量はfull inhibition or stimulationを与えるような高用量)のIV infusionデータの取得が提案されている

Sharma, et al. Br J Clin Pharmacol. (1998)

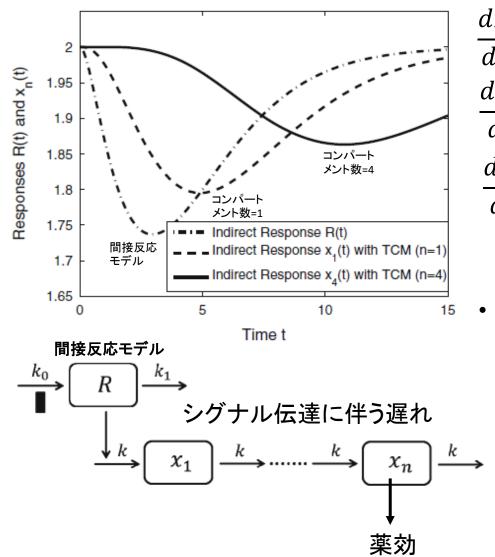
<u>Characteristics of indirect pharmacodynamic models and applications to clinical drug responses</u>

シグナル伝達(signal transduction)モデル

内因性物質の変動



シグナル伝達(signal transduction)モデル



$$\frac{dR}{dt} = k_0 \cdot (1 - I(t)) - k_1 \cdot R(t)$$

$$\frac{dx_1}{dt} = k \cdot (R(t) - x_1(t))$$

$$\frac{dx_i}{dt} = k \cdot (x_{i-1}(t) - x_i(t))$$

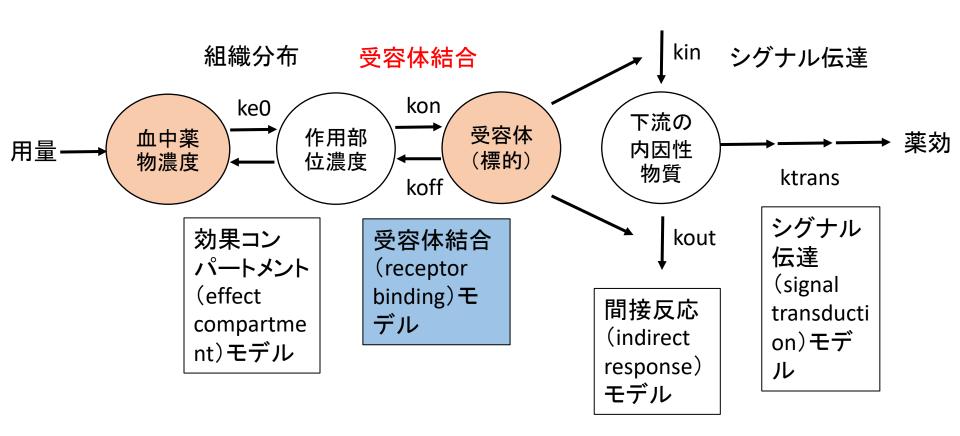
$$R_0 = x_1(0) = x_i(0) = k0/k1$$
; baseline

- ・ Transitコンパートメントモデルと同じ コンセプト
 - コンパートメントの数だけ微分 方程式を設定
 - コンパートメント数はデータに 基づいて決める

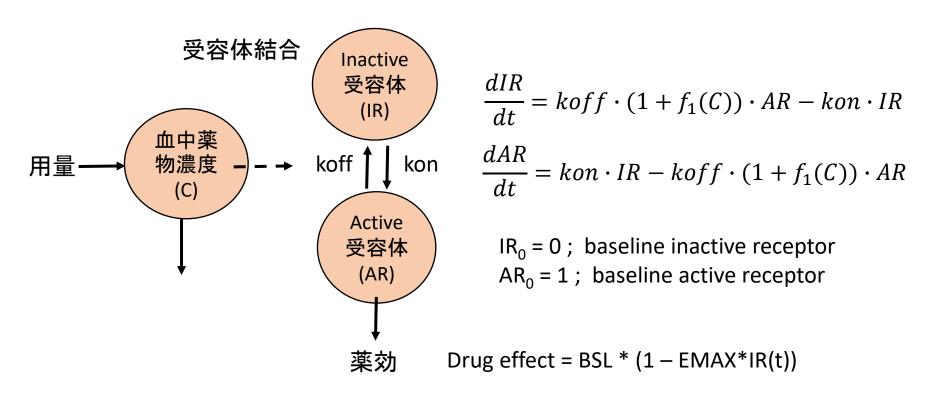
Koch, et al. J Pharmacokinet Pharmacodyn. (2014)

受容体結合(receptor binding)モデル

内因性物質の変動

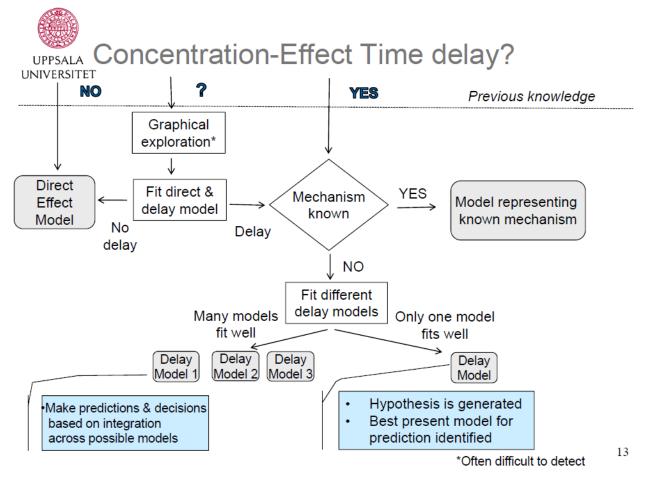


受容体結合(receptor binding)モデル



Kd = koff/kon; dissociation constant

薬理作用の遅延(drug effect delay)を説明するモデルは、どのように選んだらよいか?



- まずは、薬理作用に 遅延があるか検討
- 遅延がある場合:
 - メカニズムに基づいてモデルを採用
 - メカニズムが不明な場合は、複数の 遅延モデルを検討し、当てはまりを見てモデルを決定

以上が基本。複雑に見えるモデルも殆どはこれらの テクニックを応用・組み合わせたもの

Precursor/pool model for tolerance and rebound phenomena

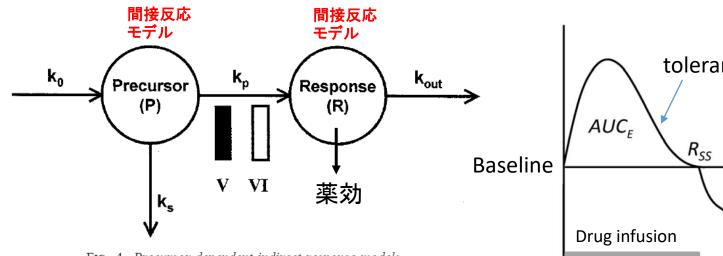
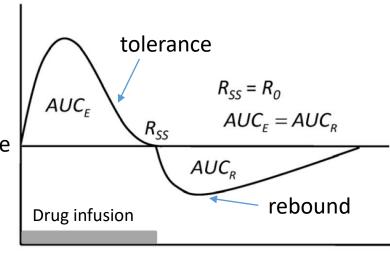


FIG. 4. Precursor-dependent indirect response models.

$$\frac{dP}{dt} = k0 \cdot (1 \pm f_1(C)) - (ks + kp \cdot (1 \pm f_2(C)) \cdot P$$

$$\frac{dR}{dt} = kp \cdot (1 \pm f_2(C)) \cdot P - kout \cdot R$$

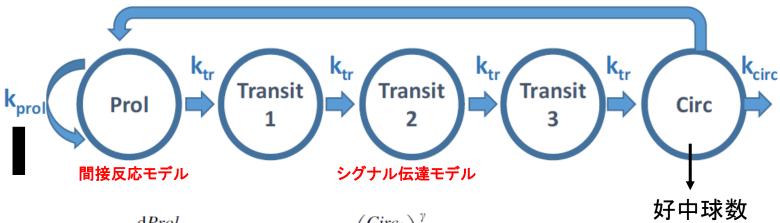


Time

以上が基本。複雑に見えるモデルも殆どはこれらのテクニックを応用・組み合わせたもの

Myelosuppresion model (Friberg model)





$$\frac{\mathrm{d}Prol}{\mathrm{d}t} = k_{prol}Prol\left(1 - E_{drug}\right) \left(\frac{Circ_0}{Circ}\right)^{\gamma} - k_{tr}Prol$$

$$\frac{\mathrm{d}Transit_1}{\mathrm{d}t} = k_{tr}Prol - k_{tr}Transit_1$$

$$\frac{\mathrm{d}Transit_2}{\mathrm{d}t} = k_{tr}Transit_1 - k_{tr}Transit_2$$

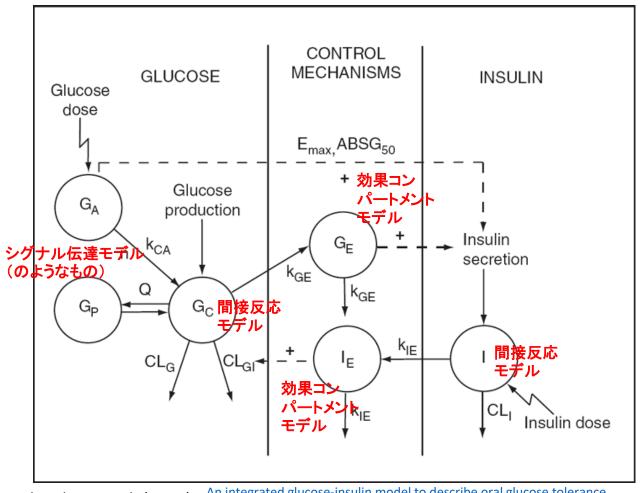
$$\frac{\mathrm{d}Transit_3}{\mathrm{d}t} = k_{tr}Transit_2 - k_{tr}Transit_3$$

$$\frac{\mathrm{d}Circ}{\mathrm{d}t} = k_{tr}Transit_3 - k_{circ}Circ$$

Chemotherapyの曝露から 好中球数減少発現までの 遅れを表現

以上が基本。複雑に見えるモデルも殆どはこれらのテクニックを応用・組み合わせたもの

Integrated Glucose-Insulin model in T2DM



PK/PDモデルの構築手順

どういう順序で構築する?

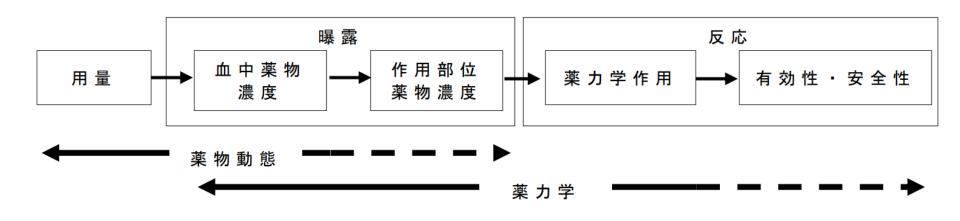


図1 薬物の用量、曝露と反応の関係

 PK/PDモデル = PKモデル + 薬理作用モデル

 薬理作用の遅延モデル

PK/PDモデルをどういう順序で構築すればよいか、シミュレーションで検討されている

Simultaneous vs. Sequential Analysis for Population PK/PD Data I: Best-case Performance

Liping Zhang, 1 Stuart L. Beal, 2 and Lewis B. Sheiner^{2,3,*}

Received December 10, 2002—Final August 20, 2003

Simultaneous vs. Sequential Analysis for Population PK/PD Data I: Best-Case Performance

J Pharmacoki net Pharmacodyn (2012) 39:177–193DOI 10.1007/s10928-012-9240-x

ORIGINAL PAPER

Evaluation of IPPSE, an alternative method for sequential population PKPD analysis

B. D. Lacroix · L. E. Friberg · M. O. Karlsson

論文で検討されたPK/PDモデルの構築 手順

- ・同時(Simultaneous)アプローチ
 - PKパラメータとPDパラメータを同時に推定する
 - Simultaneous approach (SIM)
- 段階的(Sequential)アプローチ
 - ・まずPKパラメータを推定し、続いてPDパラメータを推定する
 - Population PK Parameters (PPP)
 - Population PK Parameters and Data (PPP&D)
 - Individual PK Parameters (IPP)
 - Individual PK Parameters and their uncertainty (SE) (IPPSE)

各アプローチの意図

- PKとPDを同時に推定した方がよいと考える立場
 - PDデータはPK情報を持っており、全てのPK情報を使うべき
 - 例えば、PDの時間推移=PKの時間推移、高レスポンス=高曝露
 - 同時解析すればPKパラメータをより正しく推定できる
 - 正しい推定値・SEが得られる
 - ・ 段階的アプローチでは、PK部分の固定方法によってはPDパラメータ推定に バイアスが生じる
- PKとPDを段階的に推定した方がよいと考える立場
 - 計算時間、モデルの安定性の点で勝るモデルの方がよい
 - 同時アプローチは推定するパラメータ数が多く計算時間がかかり、モデルも 不安定になりがち
 - PDモデル構造が悪くてもPKパラメータ推定値に影響しない
 - 同時アプローチでは、PDモデル構造が悪いとPKパラメータ推定値にバイアスが入ってしまう

Simultaneous approach (SIM)

- PKパラメータとPDパラメータを同時に 推定する
 - データセットには、個別PKデータと 個別PDデータを含める
- Pros
 - 全てのPK情報(個別PKデータ、PD データがもつPK情報)を利用
 - 正しい推定値・SEが得られる
- Cons
 - 計算時間が長く、モデルが不安定 になりがち
 - PDモデル構造が悪いと、PKパラメータ推定値にバイアスが入る
- 総評
 - 正しい推定値が得られるが、計算時間・モデル不安定性のデメリット により、あまり使われない
 - PDがPKに影響を及ぼす場合は必須

```
$INPUT ID TIME DV AMT FLG
; ID TIME DV AMT FLG
      0 1 0 2;PD
 1 0 0 1 0; DOSE
 1 1 5 0 1;PK
      1 2 0 2;PD
; 1
$PK
CL = THETA(1) * EXP(ETA(1))
V = THETA(2) * EXP(ETA(2))
 BSL = THETA(3) * EXP(ETA(3))
 SLP = THETA(4) * EXP(ETA(4))
$ERROR
CP = F
 EFF = BSL + SLP * CP
Y = CP * EXP(EPS(1))
 IF (FLG.EQ.2) Y = EFF * EXP(EPS(2))
$THETA (0,1); CL
$THETA (0,1); V
$THETA (0,1); BSL
$THETA (0,1); SLP
$OMEGA 0.1 0.1 0.1 0.1
$SIGMA 0.1 0.1
                                    40
```

Population PK Parameters (PPP)

- まずPKパラメータを推定し、続いて PDパラメータを推定する。その際:
 - PKパラメータは母集団推定値を与える(固定する)
 - データセットには個別PDデータのみ を含め、個別PKデータは与えない
- Pros
 - 計算時間が最も短く、モデルも安定
- Cons
 - 個別PK情報を全く使わない
 - PDパラメータ推定値・SEが不正確
- 総評
 - 段階的アプローチの中で最もパフォーマンスが悪く、積極的に使う 理由は存在しない
 - PKデータがないが、文献のpopPKモデル を利用してPK/PD解析を行う場合に限っ て利用できるオプション

```
SINPUT ID TIME DV AMT FLG
; ID TIME DV AMT FLG
      0 1 0 2;PD
 1 0 0 1 0; DOSE
; 1 1 2 0 2; PD
ŚPK
CL = THETA(1) * EXP(ETA(1))
V = THETA(2) * EXP(ETA(2))
 BSL = THETA(3) * EXP(ETA(3))
 SLP = THETA(4) * EXP(ETA(4))
SERROR
CP = F
 EFF = BSL + SLP * CP
Y = EFF * EXP(EPS(1))
$THETA (1 FIX); CL
$THETA (1 FIX); V
$THETA (0,1); BSL
$THETA (0,1); SLP
$OMEGA 0.1 FIX 0.1 FIX
$OMEGA 0.1 0.1
$SIGMA 0.1
```

Individual PK Parameters (IPP)

- まずPKパラメータを推定し、続いて PDパラメータを推定する。その際:
 - PKパラメータは個別経験ベイズ推 定値(EBE)を与える
 - データセットには個別PDデータとPK パラメータのEBEを含め、個別PK データは与えない
- Pros
 - 計算時間が最も短くモデルも安定
 - 個別PK情報を使うのでPPPに勝る
- Cons
 - PKパラメータEBEのshrinkageが大きい場合、PDパラメータの個体間変動(IIV)を過大推定する
 - PDパラメータのSEを過小推定する
- 総評
 - 計算時間・モデル安定性のメリット から、結局一番よく使われている
 - PDパラメータIIVを<mark>過大推定</mark>する可能性 に注意が必要

```
SINPUT ID TIME DV AMT FLG ICL IV
; ID TIME DV AMT FLG ICL IV
      0 1 0 2 2 3; PD
; 1 0 0 1 0 \frac{2}{3}; DOSE
; 1 1 2 0 2 2 3; PD
$PK
CL = ICL
V = IV
 BSL = THETA(1) * EXP(ETA(1))
SLP = THETA(2) * EXP(ETA(2))
SERROR
CP = F
 EFF = BSL + SLP * CP
Y = EFF * EXP(EPS(1))
$THETA (0,1); BSL
$THETA (0,1); SLP
$OMEGA 0.1 0.1
$SIGMA 0.1
```

Population PK Parameters and Data (PPP&D)

- まずPKパラメータを推定し、続いてPDパラメータを推定する。その際:
 - PKパラメータは母集団推定値を与える (固定する)
 - データセットには個別PKデータと個別 PDデータを含める
- Pros
 - SIMよりも計算時間が短くモデルも安定
 - 個別PK情報を使うのでPPPに勝る
 - PKパラメータをEBEに固定しないので、 shrinkageがあってもPDパラメータIIVに バイアスが入りにくい(IPPに勝る)
- Cons
 - IPPよりも計算時間が長い
- 総評
 - Zhang et al (2003)の推奨オプション
 - バランスはよいがIPPよりも計算時間が 長く、あまり普及していない印象

```
SINPUT ID TIME DV AMT FLG
; ID TIME DV AMT FLG
      0
         1
             0 2;PD
 1 0 0 1 0; DOSE
 1 1 5 0 1; PK
  1
                  2; PD
ŚPK
CL = THETA(1) * EXP(ETA(1))
V = THETA(2) * EXP(ETA(2))
BSL = THETA(3) * EXP(ETA(3))
SLP = THETA(4) * EXP(ETA(4))
SERROR
CP = F
EFF = BSL + SLP * CP
Y = CP * EXP(EPS(1))
IF (FLG.EQ.2) Y = EFF * EXP(EPS(2))
$THETA (1 FIX); CL
STHETA (1 FIX); V
$THETA (0,1); BSL
$THETA (0,1); SLP
$OMEGA 0.1 FIX 0.1 FIX
$OMEGA 0.1 0.1
$SIGMA 0.1 FIX 0.1
                                     43
```

Individual PK Parameters and their uncertainty (SE) (IPPSE)

- まずPKパラメータを推定し、続いてPDパラメータを推定する。その際:
 - PKパラメータは個別経験ベイズ推定値 (EBE)とそのSEを与える
 - データセットには個別PDデータ・PKパラメータのEBE・そのSEを含め、個別PKデータは与えない

Pros

- PPP&Dよりも計算時間が短く、IPPの計算時間に近づいた
- 個別PK情報を使うのでPPPに勝る
- PKパラメータをEBEに固定しないので、 shrinkageがあってもPDパラメータIIVにバ イアスが入りにくい(IPPに勝る)

Cons

- PKパラメータEBEのSEを取り出す手間が 必要
- 総評
 - IPPのメリットを残し、PPP&Dのデメリットを 改善したオプション
 - まだ使用実績に乏しい

```
SINPUT ID TIME DV AMT FLG ICL IV SECL SEV
; ID TIME DV AMT FLG ICL IV SECL SEV
             0 2 2 3 0.2 0.3; PD
 1 0 0 1 0 2 3 0.2 0.3; DOSE
; 1
      1 2 0 2 2 3 0.2 0.3; PD
ŚPK
CL = ICL * EXP(ETA(3)*SECL)
V = IV * EXP(ETA(4)*SEV)
 BSL = THETA(1) * EXP(ETA(1))
 SLP = THETA(2) * EXP(ETA(2))
SERROR
CP = F
 EFF = BSL + SLP * CP
Y = EFF * EXP(EPS(1))
$THETA (0,1); BSL
$THETA (0,1); SLP
$OMEGA 0.1 0.1
$OMEGA 1 FIX 1 FIX
$SIGMA 0.1
```

各アプローチが採用された事例

SIM

The development and evaluation of dose-prediction tools for allopurinol therapy (Easy-Allo tools)

IPP

```
Daniel F. B. Wright <sup>1,2</sup> | Hailemichael Z. Hishe <sup>1,3</sup> | Sophie L. Stocker <sup>2,4,5</sup> | Nicola Dalbeth <sup>6</sup> | Anne Horne <sup>6</sup> | Jill Drake <sup>7</sup> | Janine Haslett <sup>8</sup> | Amanda J. Phipps-Green <sup>9</sup> | Tony R. Merriman <sup>9,10</sup> | Lisa K. Stamp <sup>7,8</sup> |
```

https://bpspubs.onlinelibrary.wiley.com/doi/10.1111/bcp.16005

Population pharmacokinetics and pharmacodynamics of nasal glucagon in patients with type 1 or 2 diabetes

```
Douglas E. James<sup>1</sup> | Tong Shen<sup>2</sup> | Jeanne S. Geiser<sup>1</sup> | Parag Garhyan<sup>1</sup> | Emmanuel Chigutsa<sup>1</sup>
```

PPP&D

https://ascpt.onlinelibrary.wiley.com/doi/10.1002/psp4.13153

Pooled Population Pharmacokinetic Analysis of Tribendimidine for the Treatment of *Opisthorchis viverrini* Infections

```
© Isabel Meister,<sup>a,b</sup> © Piyanan Assawasuwannakit,<sup>c</sup> Fiona Vanobberghen,<sup>a,b</sup> © Melissa A. Penny,<sup>a,b</sup> Peter Odermatt,<sup>a,b</sup> Somphou Sayasone,<sup>d</sup> Jörg Huwyler,<sup>e</sup> © Joel Tarning,<sup>c,f</sup> © Jennifer Keiser<sup>a,b</sup>
```

IPPSE

https://journals.asm.org/doi/10.1128/aac.01391-18

Population pharmacokinetics, pharmacodynamics and pharmacogenetics modelling of oxypurinol in Hmong adults with gout and/or hyperuricemia

```
Ya-Feng Wen<sup>1</sup> | Richard C. Brundage<sup>1</sup> | Youssef M. Roman<sup>2</sup> | Kathleen A. Culhane-Pera<sup>3</sup> | Robert J. Straka<sup>1</sup>
```

* PPPは見つからず

https://bpspubs.onlinelibrary.wiley.com/doi/10.1111/bcp.15792

PK/PDモデルのピットフォール

ベースライン値に置いた仮定の間違い

ベースライン値のmisspecificationが原因で、薬理作用(drug effect)に過小/過大評価が生じていることは多い

- ベースライン値のmisspecification
 - ベースライン値の誤差分布モデルのmisspecification
 - ・ベースライン値一定の仮定が成立しない

- ・ベースライン値は個体間変動と残差変動(測定 誤差)を含む
- ・しばしば対数正規分布・正規分布をしない

- •よくやる方法
 - ・母集団平均と個体間変動から構成される分布を与えるか、 $BL_i = \widehat{BL} \cdot \exp(\eta_i)$
 - 個別観測値そのものを与えてきた

$$BL_i = BL_{i,o}$$

- ・しかし、実際にはベースライン値は個体間変動と残 差変動(測定誤差)を含んでいる
 - ・どのようなベースラインモデルがよいか?

シミュレーションによる検討

- B1: Estimating the typical value and IIV of baseline
- B2: Incorporating the observed baseline as a covariate acknowledging RV
- B3: The observed baseline as a covariate, with no assumption about size of IIV and RV
- B4: The observed baseline

$$BL_i = \hat{B}L \cdot e^{\eta_i}$$

$$BL_i = BL_{i,o} \cdot e^{\eta_{i,RV}}$$
 $\eta_{i,RV} \sim N(0,\sigma)$; σໄຊRVØSD

covariate, with no
$$BL_i = \left(\hat{B}L \cdot \frac{\sigma^2}{\omega^2 + \sigma^2} + BL_{i,o} \cdot \frac{\omega^2}{\omega^2 + \sigma^2}\right) \cdot e^{\eta_{i,RV} \cdot \frac{\omega^2}{\omega^2 + \sigma^2}}$$

$$BL_i = BL_{i,o}$$

ベースライン値の誤差分布モデルの

misspecification

B2

```
$INPUT ID TIME DV MDV CMT BSL
; ID TIME DV MDV CMT BSL
; 1 0 5 1 1 5 ; PD (Baseline)
; 1 1 4 0 1 5 ; PD

$PK

IF(TIME.EQ.0) OBASE = BSL; observed baseline
IBASE = OBASE*EXP(ETA(1)*THETA(1))
$ERROR

IPRED = A(1)
Y = IPRED+EPS(1)*THETA(1)
$THETA (0.1); RV magnitude (sd)
$OMEGA 1 FIX
$SIGMA 1 FIX
```

B3

```
SINPUT ID TIME DV MDV CMT
; ID TIME DV MDV CMT
; 1 0 5 0 1 ; PD (Baseline)
; 1 1 4 0 1 ; PD
ŚPK
 BPOP = THETA(1); population baseline
IF(TIME.EQ.0) OBASE = DV; observed baseline
IIV = THETA(2); IIV of baseline response
 RV = THETA(3); residual variability
IIVW = IIV**2/(IIV**2+RV**2)
 RVW = RV^{**}2/(IIV^{**}2+RV^{**}2)
IBASE = (BPOP*RVW + OBASE*IIVW)* EXP(ETA(1)*RV*IIVW)
SERROR
IPRED = A(1)
IF (TIME.EQ.0) IPRED = BPOP+IIV
Y = IPRED + EPS(1)*RV
$THETA (5); BASE
$THETA (0.3); IIV baseline magnitude (sd)
$THETA (0.3); RV magnitude (sd)
$OMEGA (1 FIX) (1 FIX)
SSIGMA 1 FIX
```

結論

- B1: パラメータ推定値のバイアス・精度の点で最も優れていた
 - Gold standardであることが確認された
- B4: パフォーマンスは最も悪く、使うべきでない
- B2/B3: B1とパフォーマンスにあまり差がないという検討結果。
 ただし、B1に対して以下のメリットがある:
 - B1よりも、ベースライン値分布のmisspecificationの影響を受けにくい (観測値を共変量に使っているため)
 - B1よりも計算時間を短くできる

Approaches to handling pharmacodynamic baseline responses

・分布に変換を施すことで、対数正規分布・正規分布に従わ ない様々な形状に対応可能

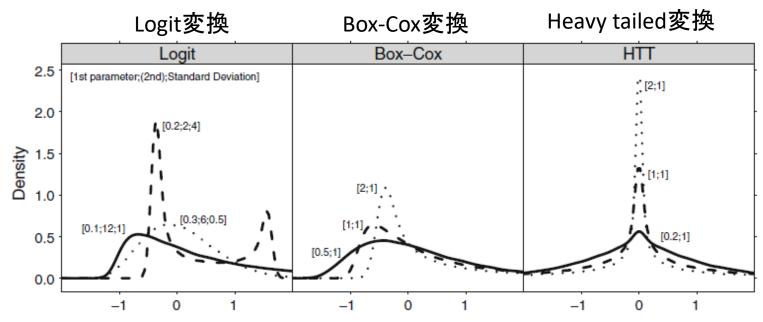


Fig. 1. Examples of a normal distribution transformed by the different transformations. The shape parameter values used to create the distributions and the standard deviation of the original distribution are indicated.

$$\eta_{i_Transformed} = \left(e^{\left[LOG\left(rac{ heta_1}{(1- heta_1)}
ight) + \eta_i
ight]} \cdot \left(1 + e^{\left[LOG\left(rac{ heta_1}{(1- heta_1)}
ight) + \eta_i
ight]}
ight)^{-1} - heta_1
ight) \cdot heta_2$$

$$\eta_{i_Transformed} = \frac{\left((e^{\eta_i})^{\theta_1} - 1 \right)}{\theta_1}$$

$$\eta_{i_Transformed} = \eta_i \cdot |\eta_i|^{\theta_1}$$

Logit transformation

LGPAR1 = THETA(1)

LGPAR2 = THETA(2)

PHI = LOG(LGPAR1/(1-LGPAR1))

PAR1 = EXP(PHI+ETA(1))

ETATR = (PAR1/(1+PAR1))-LGPAR1)*LGPAR2

CL = TVCL*EXP(ETATR)

Box-Cox transformation

BXPAR = THETA(1)

PHI = EXP(ETA(1))

ETATR = (PHI**BXPAR-1)/BXPAR

CL = TVCL*EXP(ETATR)

Heavy tailed transformation

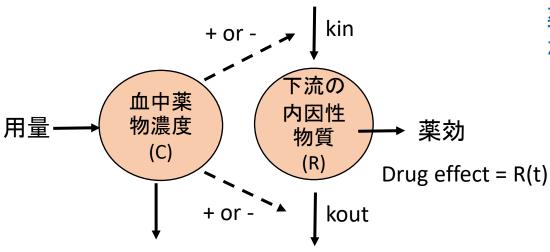
HTPAR = THETA(1)

ETATR = ETA(1)*SQRT(ETA(1)*ETA(1))**HTPAR

CL = TVCL*EXP(ETATR)

ベースライン値一定(定常状態)の仮定

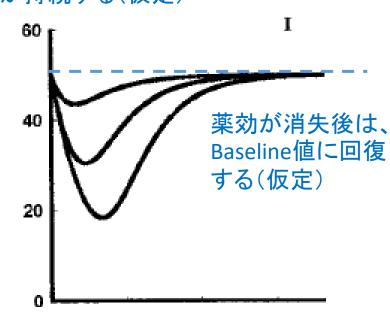
間接反応(indirect response)モデル



$$\frac{dR}{dt} = kin \cdot (1 \pm f_1(C)) - kout \cdot (1 \pm f_2(C)) \cdot R$$

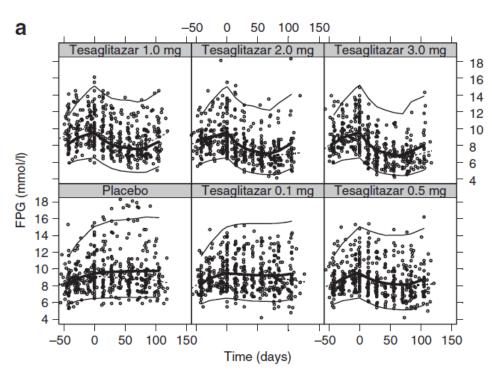
R(0) = kin/kout; baseline response (一定値を仮定)

薬剤投与がなければ、Baseline値 が持続する(仮定)



- 前治療のウォッシュアウト期間の不足
- 日内変動
- ・疾患進行(自然歴)、プラセボ効果

・前治療のウォッシュアウト期間の不足



FPG:空腹時血糖

Hamren, et al. Clin Pharmacol Ther. (2008)

- ・ 前治療ありの患者集団では、6週のrun-in期の後もFPGは上昇を続ける(プラセボ群)
 - ベースライン値≠定常状態のモデルで対応する

```
$PK

BASE = THETA(.) *EXP(ETA(.)) ; BSL FPG

KOUT = THETA(.)

WASH = THETA(.) *EXP(ETA(.)) ; w/ prior therapy

IF (NAIV.EQ.1) WASH=0 ; w/o prior therapy

KIN = KOUT * BASE

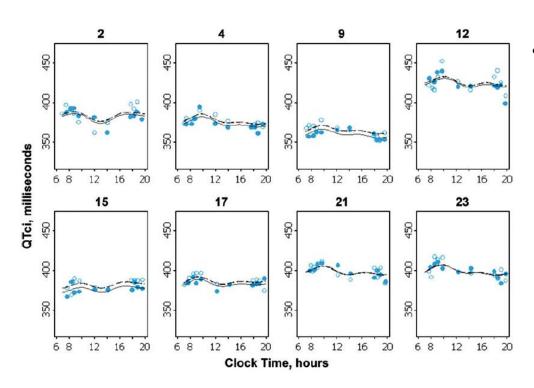
F2 = BASE ; BSL FPG

$DES

DADT(2) = KIN*(1+WASH)-

KOUT*A(2)*(1+EMAX*CP/(CP+EC50)) ; FPG
```

• 日内変動



- QTc間隔データは日内変動パターンを示す(24時間周期)
 - コサイン関数でモデル化する

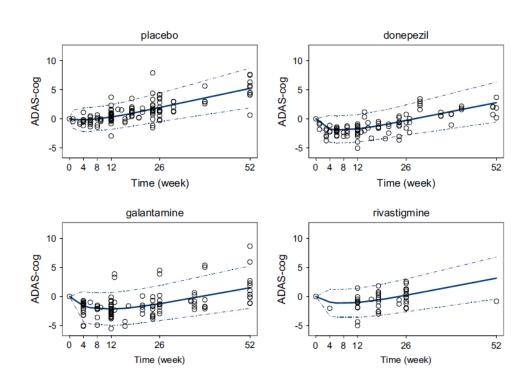
$$QT_{ij} = QTcm_i \cdot RR_{ij}^{\alpha_i}$$
$$\cdot (1 + CIRC_i) \cdot (1 + \varepsilon_{ij})$$

$$CIRC_{i} = A_{1,i} \cos[2\pi(t - \phi_{1,i})/24]$$

$$+A_{2,i} \cos[2\pi(t - \phi_{2,i})/12]$$

$$+A_{3,i} \cos[2\pi(t - \phi_{3,i})/6]$$

•疾患進行(自然歴)、プラセボ効果



- アルツハイマー型認知症は進行性 疾患であり、ADAS-cogスコアは悪化 を続ける(プラセボ群)
 - 疾患進行モデル、プラセボ効果モデルを構築する

$$S(t)$$
= $S(0)$ + $\alpha \cdot t$ + $PD_{pbo}(t)$ + $PD_{drug}(t)$ + ϵ 疾患進行 プラセボ 効果

$$PD_{pbo}(t) = \beta_p \cdot (e^{-Kel_p \cdot t} - e^{-Keq_p \cdot t})$$

まとめ

- ・なぜPK/PD関係をモデル化するのか?
- ・様々なPK/PDモデル(構造モデル)
 - ・薬理作用のモデル
 - 薬効の遅延を説明するモデル
- PK/PDモデルの構築手順
- PK/PDモデルのピットフォール
 - ・ベースライン値に置いた仮定の間違い